

活用できるピアノ奏法（Ⅱ）

—コード付きメロディー譜を活用するための コードネーム習得方法の考察—

井本 英子

キーワード：活用できるピアノ奏法、コードネーム、コード付きメロディー譜、
ピアノアレンジ

はじめに

成人がピアノ演奏を学ぶ目的として、「色々な曲を弾いて楽しむ」「既成曲のレパートリーを増やす」「各種アンサンブルや伴奏をして楽しむ」「教育現場で活用する」「各種コミュニティの現場で活用する」等がある。既成の楽曲や練習曲を読譜して弾けるように学ぶという従来の学び方だけでは十分には目的が果たされない。「今、弾きたい曲、求められている曲を即座に流れのある音楽として奏でられる」というピアノ演奏への即応力をつけることで成人の方々のピアノ演奏がより豊かな活動になる。活用できるピアノ演奏のためにはメロディーとコードネームで記された楽譜による演奏法を身に付けることが有効であると考え。その際にコードネームを理解して弾けることが必要なスキルとなる。本稿では音楽専門課程の学生と保育者養成課程の学生と一般の社会人の方々の学びからコードネームを学ぶ有効性と習得する手法を考察する。

1 コード付きメロディー譜による奏法

ピアノ演奏といえば一般にクラシック音楽ではピアノ譜に記されている完成された楽譜を読譜して弾くと認識されている。ピアノ独奏であったり、他の楽器や声楽の伴奏であったり、様々なスタイルのアンサンブルであったりとその種類は多様である。主に大譜表上に作曲者が指定して音やリズムをはじめとする多量の情報を記された楽譜をピアノ音で再生するということになる。楽譜を介さない演奏としては、演奏者自身の創作による楽曲演奏がある。この場合作曲者の記録として楽譜があってもそれは二次的な役割である。その他にメロディーやコードネーム等部分的な決まり事を基にした演奏や即興演奏がある。ジャズやポピュラー音楽ではこれが主流である。¹ このメロディーとコードネームによる奏法（コード付きメロディー譜による奏法）をジャズ、ポピュラー、クラシックというジャンルに囚われることなく、ピアノ演奏のための要素としてその技術を身につけることが成人のピアノ演奏の目的を達成させることに寄与すると考える。成人がピアノ演奏を楽しんだり活用したりする際にこの演奏技術は、前述の演奏を学ぶ目的の「既成曲のレパートリーを増やす」には当てはまらないが、その他の項目には全て非常に有効である。第1に読譜の負担が軽減し楽曲の全体像が早くできあがる。練習で聴

く自分のピアノの音が音楽的に流れていたら練習はますます楽しくなる。第2に読譜力や演奏技術や楽典の知識がなくても弾きたい曲を自分の技量に合わせて弾くことができる。第3にこの練習過程でアレンジ力も養うことができる。アレンジ力を身に付けることでピアノ演奏の活用範囲は飛躍的に広がる。第4にピアノの様々なメカニカルなテクニックを弾きたい曲の中に組み込んで向上することができる。好きな曲からの技術習得は積極的な反復練習を促し相乗効果を生む。

完成されたクラシック既成曲の忠実な再現の中での自己表現の模索の楽しみとは異なる楽しみ方として、コード付きメロディー譜による奏法でピアノ演奏を自分でアレンジして自己表現する楽しみを普及させたい。

1－(1) 一般、社会人の方々への必要性

ピアノを習った経験のある方々がピアノ演奏を楽しみたいと思っても既成曲を読譜して完成できるまでには時間がかかる。ピアノの楽譜は情報量が多大であり読譜の負担は大きい。ピアノは弾けるが、「今、弾ける曲がない」ということで演奏機会が消極的になる。「自分が弾きたいと望む楽曲」「弾いてもらいたいと望まれている楽曲」を弾くことがもっと容易になればよい。「望まれている楽曲」を弾くことができると他の人とも分かち合い楽しむ演奏の機会が増える。「望まれている楽曲」というのは、その時の場所や用途や雰囲気に合わせて表現で奏する楽曲ということになる。音楽の表情を多種多様に自在に演奏するスキルを身に付けることで誰しも「望む楽曲」「望まれた楽曲」の演奏を楽しむことができる。また、アンサンブルでパート譜や伴奏譜のない場合でもコードがわかれば伴奏ができ、アレンジ力も発揮して積極的な参加の機会が増える。

1－(2) 教育現場での必要性

様々な教育現場で「望まれている楽曲」にはピアノ演奏の即興的要素が必要とされている。『音楽教育メソッドの比較』²の中でジャック＝ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze 1865～1950) のユーリーズミックスの授業における指導者の音楽について次のように述べられている。「即興演奏の使用は、教師が生徒の必要性に合わせて、授業時間内のどの時点からでもレッスンを変えていくことや、簡単なものからだんだん複雑な課題へと変えていくことを可能にする。即興演奏を用いると、教師は音楽の背景も前景も同時に示すことができ、生徒たちは音楽の中で進行している相互作用をすべて知覚し、感じ取り、吸収することができる。こういうわけで、これは、生徒が音楽的な関係についてさらに完全な情報を理解することを助けるのだ。反対に、作曲された音楽を使用するとき音楽的な意義(効果)はすでに決まっており、リズム・メロディー・和声の効果は、すでに前もって複雑な相互関係をもった状態にあるのである。」³ また、「初歩段階の学習では、即興的な実験を通して、(長すぎる、短すぎる、音が強すぎる、

弱すぎる、ちょうど良い、などの）美的な判断をする生徒の能力や知識の個人的で表現的な応用力を強めていくので学習した要素の上にたって即興される音楽は最も重要な材料となる。」⁴と述べている。指導者が楽譜にとらわれず音楽の雰囲気や用途、自分の演奏技量に合った即興演奏でいろいろな表情を豊かに表現できることは、子どもたちの音楽活動をより自由に豊かに支えることになる。教育現場に携わる方々にも音楽の表情を多種多様に自在に演奏するスキルを身に付けることが必要である。

1－(3) 音楽専門家への必要性

音楽を専門に学ぶ方々、演奏家にとっても音楽の表情を多種多様に自在に演奏するスキルを身に付けることは必要である。多種多様な場面に即応した演奏はプロに求められることの一つで非常に重要課題である。

2 即興演奏について

前述の即興演奏の技能を習得すれば楽譜にとらわれず自在に演奏することができる。しかし、即興演奏の技術は、ピアノ演奏技術のみならず高い音楽の感性やソルフェージュ能力が求められる。ピアノレッスンを長く受講している方々であってもその能力の十分な育成を含めたレッスンを受講されている方は非常に少ない。また習得のための様々な練習の中で「好きな曲を弾きながら学ぶ」要素が組み込みにくい。そこで一般成人のピアノ演奏者に即興演奏の手法も学びながらアレンジ力を身に付けて楽曲演奏を楽しむ方法としてはコード付きメロディー譜による演奏法を推奨する。メロディーと和音で曲の全体像を把握し最初の段階から音楽全体を自分の技量で演奏する。その音楽の流れの中で自分の技量に合わせてアレンジしながら自分の弾きたい音楽に仕上げていくという方法である。伴奏部分を和声学や楽譜から学ぶのではなく、コードネームを用いることが効率的で容易な方法と考える。

3 コードネームについて

コードネームはポピュラーやジャズのジャンルでは必須事項として用いられるが、クラシックでは通常は使われない。それ故ピアノ指導者も実際のクラシックの楽曲の演奏には使われないので理論上理解されていても精通されている方は少ない。「コードネームを使って簡単に弾く」という場合、和音表記の利便性のみに焦点を当てられていることが多い（後述詳細）。単に表記法としての理解だけでなくコードネームを使った演奏の活用法の多様性を認識して学習に取り入れることが有用である。

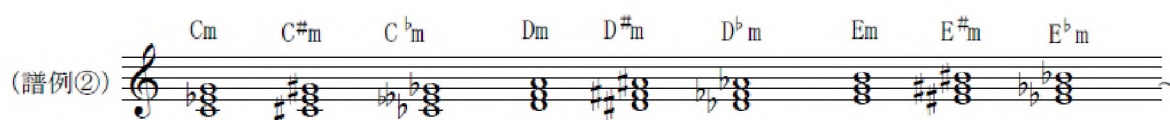
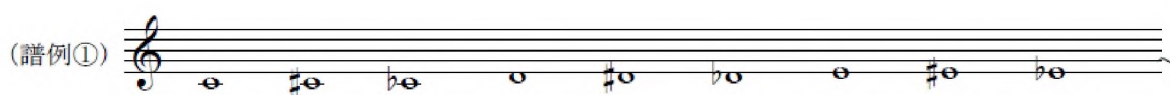
子どもが初めてピアノを習う場合「ド」の音や指の使い方から順を追って「ドレミ」を弾き「ドミソ」も弾けるようになる。ピアノ指導のための様々なアプローチからの数多くの指導法がある。そのためのテキストも豊富にある。どのメソッドであれ、学ぶ子どものその時の演奏

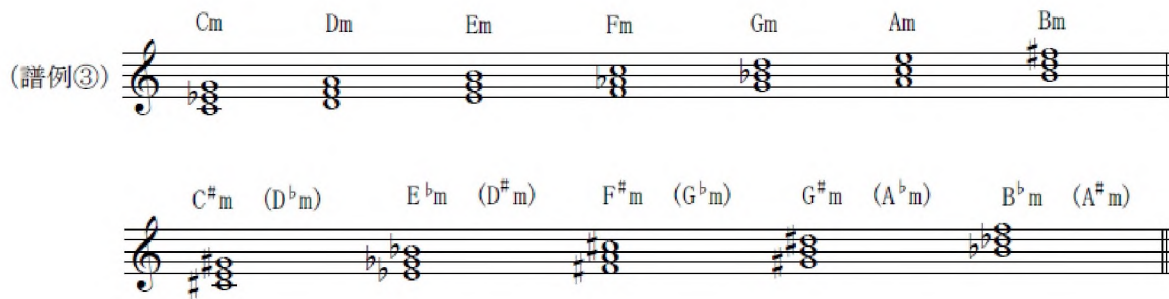
技術に即した最善の音楽を奏でながら順序だてて技術が向上するようにカリキュラムが組まれ音楽表現力も豊かに広がるように考えられている。成人の場合も効率よく、しかも音楽的に豊かに楽しく技術向上していくためには順序だてて学ぶことが不可欠であると考え。様々な教育現場等では必要なスキルで需要があるにもかかわらず確立された教育法、指導法がないため普及しない。コードネームをどの様に学習に組み込むか、その過程を追いながら有効性と指導手法を考察する。

3-1 コードネーム習得に際して

クラシック音楽では和声を学ぶ際、調性を理解した上で主に和音記号を用いる。各々の和声の機能的なはたらきを踏まえた上で和声間の繋がりを理解していく。和声を学んだ者には和音記号に置き換えることは楽曲を分析、把握する上で非常に便利で有効なことである。しかし和声進行が複雑になると和音記号で記されたものを演奏時に音に変換するには、あらゆる調で和音記号を即座に思い浮かばなければ難しい。一方コードネームは調性や和声の機能にはほぼ関係なく記されるので即応できる。これは使っていく上で調性や和声に関する裏づけとなる知識が乏しくても実践していきやすいということである。

コードネームは「ドレミファソラシ」の白鍵7音と黒鍵5音をルート音（根音）にして作られる色々な和音を記号で表したものである。例えばドの音をルートにした長三和音を「C」とし、短三和音を「Cm」とする。理論的には「ドレミファソラシ」7音の各音に対して#とbがつくので「C（ド）」「C#（ド#）」「Cb（ドb）」（譜例①）のようになり合計21通りのルート音がある。一つの種類の和音にルートが異なる21の和音がありそれぞれに名前をつけて区別する。例えば短三和音であれば、「Cm, C#m, Cbm, Dm, D#m, Dbm, Em, E#m, Ebm, ……」（譜例②）というように21の短三和音が存在する。実音としては例えばC#とDbは同じ音である様に表記は異なるが同じ音（異名同音）が含まれるので実際に奏するのは1種類の和音に対して12通りである（譜例③）。





和音の種類は基本の三和音 4 種類〔長三和音 (major triad)、短三和音 (minor triad)、増三和音 (augmented triad)、減三和音 (diminished triad)〕(譜例④) の他に様々な付加和音がある。その数の多さにとても覚えきれないと躊躇される。成人は理論的な説明でその構造を理解するのは容易だが、それを覚えたり奏したりするには相応な時間がかかる。



理論的に和音を理解する場合、その前段階として音程やスケールの仕組みを理解しておく必要がある。ここが不確かなままコードネームを理解しようとする多様な付加和音には対応しきれなくなる。しかし、この楽典の部分がわからなければコードで弾けないというのであればコード奏までの道のりが遠すぎる。

3-2 音楽専門課程の学生のコードによる学び

音楽を専門に学ぶ学生たちにとってコードネームを理解してコード付きメロディー譜による演奏法を身に付けることは重要課題である。この学生たちは前述の和声感や楽典の知識やコードネーム自体の知識もある。特に鍵盤楽器が専門の学生は高度なピアノ演奏技術も持っている。しかし実践的にコード付きメロディー譜による演奏をする場合その知識と技術が直結しなければ音楽として流れない。演奏力向上のためには第1にコードに即応して弾ける、第2にアレンジ力を身に付ける必要がある。

ひとつのコードネームを見たときそれは和音の構成音のみ記されているわけであるから、そこからベース音、鳴らしたい和音の響きから考えるポジション、メロディーとのバランス、そしてリズムスタイル等、選択して構成する。そのコードから別のコードにチェンジする可能性も多々ある。一つの和音からたくさんのバリエーションが想像できて弾けることが望まれる。

まずは音楽の流れの中でコードネームを即座に変換して弾けるようになることである。そのためのドリルを取り入れる。

コードネームは1種類の和音に対して実質 12 通りあり、基本の三和音は4種類と数多くの付加和音があると前述した。コードの知識を得て理論上理解しても即応できなければ演奏スキルとは直結しない。コードネームを見て即応する必要があるものと理論的に理解することで対応できるものとを分けたとき、前者は3種類「major triad」、「minor triad」、「dominant 7th.」に絞られると考える。まずこの3種類に即応できることで自由に演奏できる曲が広がる。そのために2つのドリルを課す。

3-2-(1)「両手奏による鍵盤順でのコード奏のドリル」

和音を確実に捉えて弾くドリル。一種類ずつ調性には関係なく楽譜を見ずに鍵盤を見て弾く。例えば major triad の場合「C D E F G A B」の順に7通り弾き（譜例⑤）、続いて黒鍵「D \flat E \flat G \flat A \flat B \flat 」の順に5通り弾く。左手はルート音を弾き、右手は和音を弾く。確実にできたことを確認した後、和音の転回形に進み同様に弾く（譜例⑥）。まずは両手ともに全音符で弾くがアレンジのスキルを同時に学べるように色々な種類のリズムスタイルでの伴奏パターンで弾く（譜例⑦ Ex.1~3）。鍵盤楽器が専門でない学生には転回形を即時に弾くことは難易度が高いので伴奏パターンは各自の習熟度に合わせて進む。3種類のコードとも、このドリルを積み重ねる。

（譜例⑤）



（譜例⑥）



(譜例⑦ 1～3)

(譜例⑦) Ex. 1

Ex. 2

Ex. 3

3-2-(2) 「コードネーム速読変換ドリル」

コードネームを見てすぐに弾くドリル。調性は関係なく各和音は連結していない。左手はルート音、右手は和音の両手奏。20 番までのコードを正しく、できるだけ速く弾く。20 番まで弾き終えるタイムを計って記録することで自己の目標を明確にする。計測は 90 秒までとし 20 番に達しない場合はできた番号を記す。major triad のドリル [C—M.t.・1] (図表①) から minor triad のドリル [C—m.t.・1] (図表②)、その後 dominant 7th. のドリル [C—d.7・1] (図表③) へと進み各 4 回ずつ積み重ねる。前期期間中でこの 3 つの課題に取り組む。(後期履修の際には学生の習熟度により課題が変わる。このドリルが必要でない場合も多々ある。)

(図表①) [C—M.t.・1] (実際のドリルの表は 5 列 4 行で表記)

1 C	2 D \flat	3 B	4 E	5 B \flat	6 E \flat	7 D	8 F	9 A	10 C \sharp
11 G \sharp	12 G \flat	13 E	14 B \flat	15 G	16 A	17 D	18 A \flat	19 F	20 F \sharp

(図表②) [C-m.t.-1] (実際のドリルの表は5列4行で表記)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Gm	Am	C#m	Dm	Cm	Bm	Fm	F#m	B♭m	Em
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
A♭m	E♭m	Em	G♭m	D♭m	Gm	Bm	G#m	Dm	E♭m

(図表③) [C-d.7-1] (実際のドリルの表は5列4行で表記)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
D7	A7	F7	E7	B7	C7	G7	E♭7	A♭7	G♭7
11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
B♭7	D♭7	F7	F#7	E♭7	D7	G#7	A♭7	C#7	B♭7

学生たちは毎時間この「両手奏による鍵盤順でのコード奏のドリル」と「コードネーム速読変換ドリル」を積み重ねながら、各学生のコード奏の習熟に応じリズムスタイルやメロディーフェイクなど他の様々なアレンジの素養や技術を学ぶ。ソロ演奏だけでなく伴奏や連弾やアンサンブルの中で色々なスキルを学習する。各専門に応じて最終目的（ソロピアノ演奏、弾き語り）と、そのクオリティーは異なるが、コード付きメロディー譜での演奏力はいずれも向上する。

3-3 一般の方々のコードの学び

ピアノレッスン経験あるがコードネームは全く、或いは、あまりわからないという一般の方々もコードネームを学びながらその中でアレンジの手法やピアノのメカニカルな奏法を含めて学ぶことで学習成果が上がる。コードネームの部分では、継続性等考慮し「コードネーム速読変換ドリル」は課さず「両手奏による鍵盤順のコード奏のドリル」を使う。ドリルの種類を増やして、どの場合も反復して積み重ねる。習熟に応じて minor 7th、major 7th、9th 等に進む。またその他の付加和音のコードネームは学習する様々な楽曲の中で随時習得する。コード付きメロディー譜を使うことで、すぐに連弾やキーボード・アンサンブルができる。ソロピアノだけではなく豊かな音楽体験を積むことができる。

3-4 保育者養成課程の学生のコードの学び

保育者養成課程の学生の場合、子どもの歌の弾き歌いや身体表現の音楽など子どもたちの様子や活動に即応したピアノ演奏が「望まれている楽曲」となる。この学生たちの鍵盤楽器経験は初心者から上級者まで様々である。

3-4-(1) 保育者養成課程の学生の現状の問題点

ピアノ奏の場合一般的には右手がメロディー、左手が伴奏という役割になっている。伴奏パートはベース進行と和音進行の両方を兼ねる。そもそも和声を考えるときベース音とその進行は重大な役割を果たすもので切り離しては考えられない。作曲者や編曲者は十分理解のうえ伴奏パートを楽譜にする。コードネームから伴奏パートを自由に考える際もその和声感と知識は欠かせない。保育者や指導者向けの「覚えやすい」や「弾きやすい」や「簡単な」とうたわれるコードネームを使った奏法では、ベースと和音の関係が成り立っておらず伴奏としての機能が果たせない場合がある。調性や和声感を無視したような伴奏でも弾きやすさを優先する考え方や楽譜もあるが音楽的ではないピアノ演奏になる。保育や教育に携わる方々の学びがこの状態で妥協された音楽を奏するのでは弊害が大きいと考える。

例えばC＝ドミソ、F＝ドファラ、G＝シレソ、D＝レファ＃ラと弾きやすいポジションで覚えて実践するとハ長調の曲には対応できるものが多いが、この覚え方ではト長調の曲の場合は主和音が第1転回形のポジションになり主和音のベース音が第3音となる。（譜例⑧）『うみ（井上武士作曲）』参照。



同様にヘ長調では主和音が第2転回形のポジションになり主和音のベース音が第5音となる。（譜例⑨）『はしのうえで（フランス民謡）』参照。



また、和音の転回形に触れず基本形でコードネームを説明してコード奏による伴奏付けをするとC＝ドミソ、F＝ファラド、G＝ソシレとなり、流れのない伴奏のポジションになってしまう。（譜例⑩）『はるがきた（岡野貞一作曲）』参照。



上記のような誤った対応をせずにコードネームでピアノ伴奏パートを弾くためには、基本的な和声の進行を理解して弾けることが必須となる。

3-4-(2) 「カデンツ奏のドリル」の取り組み

そこで「カデンツ奏のドリル」を取り入れた(2013、2015年度「子ども学ゼミ A」、2014年度「子ども学ゼミ B」通年受講生)。受講資格に音楽経験の有無は問わない。ピアノ演奏技術は初心者から上級者⁵まで様々である。ピアノレッスン経験者であってもどの学生も特段ソルフェージュ教育を受けてはいない。授業の中で毎時間カデンツ奏を課した。#3つ、b2つまでの長調(ハ長調、ト長調、ニ長調、イ長調、ヘ長調、変ロ長調)を全員の課題(譜例⑪)とし、習熟した者は更に新たな調に進んだ。ここで調性とカデンツとコードネームを関係付けて覚えていくようにした。ハ長調の曲であればハ長調のカデンツで覚えたF(ドファラ)を弾き、ヘ長調の曲でFであればヘ長調のカデンツで覚えたF(ファラド)を弾くようになる。カデンツを数種類機械的に弾くだけではなく『こぎつね(外国曲)』など数曲を移調してカデンツ伴奏の練習にした(譜例⑫)。

(譜例⑪)

ハ長調

ト長調

ヘ長調

ニ長調

イ長調

変ロ長調

(譜例⑫)

Three musical staves illustrating cadence exercises in 2/4 time. The first staff is in C major (C-cadence), the second in G major (G-cadence), and the third in F major (F-cadence). Each staff shows a sequence of chords and notes.

3-4-(3) 「カデンツ奏のドリル」の成果

弾いて覚えたものを活用して更に弾いていく中で定着して和音感も育まれる。しかし和音感を育む時間を待てず、各和声進行の結びつきの意図や必然性を感じられないままに各調のカデンツを覚えるのは大変困難な学習過程となった。これまでのレッスンなどで和声感が十分に養われていない現状を目の当たりにした。音楽の中でも重要な要素である和声感をその学習の中でしっかりと或いは自然に身に付け育みながらの技術向上を目指さなければならない。一方上級者は、 \sharp 、 \flat 3つの長調のカデンツは容易に覚えられたがコードネームとの関連に苦戦した。コードネームに頼らずともカデンツが弾けるからである。カデンツ奏のドリルを通して \sharp ・ \flat の多い調でも頻出の和音が定着したので1年間で伴奏変奏の応用力は向上した。しかし最終の仕上げもコード付きメロディー譜の演奏をしたがコードネームに対応して演奏するというよりは、覚えた和音で演奏することになり、中級、上級者でもコードネームを活用するまでには至らなかった。カデンツ奏からのアプローチではコード付きメロディー譜からの自在な演奏に至るのは遠回りであると考えられる。

3-4-(4) 「両手カデンツ奏」の取り組みとその成果

本来、右手のメロディー奏と左手の伴奏という2つの異なる役割のパートを同時に奏することがピアノ演奏の難しいところである。初心者にとっては2つのパートを弾くのが難しいし、上級者でもメロディーを弾きながら左手でリズムカルな伴奏をするのは難しい。そこでメロディーパートは歌にして両手で伴奏するとよい。伴奏の中でも左手はベースのパート、右手は和音のパートを担う両手伴奏である。この時コードネームによる演奏ができると、楽譜から受け取る情報は例えば「C」というだけで、読譜の必要がなく自分の技量に合わせてバリエーションして弾くことができる。

子どものための曲も大人のための曲も一般に主要三和音で対応できる曲はリズムやメロディーが比較的易しい。したがって読譜も易しい。一方、作曲された年代が新しい楽曲は様々なポピュラー音楽の影響もあり主旋律や伴奏の音やリズムを記譜すると譜面が複雑になり読譜が難しい。派生音も含まれ和声も複雑になり非常に難解な楽譜になってくる。表記された音やリズムを正確に再生できる読譜力は高い水準を求められる。このような楽曲を望まれた場合こそコードネームを使った演奏が役立つ。記譜すると難解だが聴き覚えた歌に左手のベース音と右手の和音で伴奏を付ける。伴奏のリズムは聴き覚えたものを技量に合わせて使う。2017年度「保育内容・音楽表現Ⅰ」の学生たちの例をあげる。まずコードネームによる両手奏のコード伴奏を学習する。この両手伴奏のポジションに慣れるのに初心者、初級者は反復練習が必要であった。中級、上級者には容易であった。その後数種の楽曲に合わせて歌（メロディー）と両手伴奏で弾き歌いを学習した。仕上げの楽曲『草競馬（作曲 S.C.Foster 1826～1864）』の弾き歌い奏では、ピアノ技術初心者から上級者までそれぞれの技量に合わせてリズムカルで表情豊かな伴奏での演奏が容易にできていた。（夙川学院短期大学教育実践研究紀要第11号⁶に詳細記載）伴奏パートを容易に自由に弾けることは「望まれる音楽」を弾けることの重大要素である。

3-4-(5) 2017年度「子ども学ゼミA」の授業での取り組みとその成果

音楽専門課程の学生全般に有効であった手法を音楽が専門課程でない保育者養成課程の学生にも取り入れた（2017年度「子ども学ゼミ」通年受講生）。即応に必要な3種類（「major triad」、「minor triad」、「dominant 7th.」）の確実な習得を定着するために「コードネーム速読変換ドリル」と「両手奏による鍵盤順でのコード奏のドリル」を実施した。音楽専門課程の学生とは到達目標が異なるので課題内容等は別になる。ドリル（課題例〔C1-1〕（図表④））は最終までに9種類の課題を各自の習熟度に合わせて学習した。このドリルに至るまでの準備段階もあり、このドリルと平行して学生の習熟度によって他のドリルを学習している。最終計測までの期間、自分の目標に合わせてそれぞれのドリル課題に取り組んだ。（「夙川学院短期大学教育実践研究紀要第12号⁷」に詳細記載。）3種類のコードが定着する中で流れのある音楽を自ら奏して様々な楽曲を経験するので演奏する楽しみを実感しながら学習できる。和声感を押し付けた形になってしまったカデンツ奏からのアプローチよりも、結局は早く確実にコードが弾けるようになった。

（図表④）〔C1-1〕（実際のドリルの表は4列5行で表記）

1 C	2 G	3 F	4 D	5 A	6 B	7 G	8 E	9 D	10 C
11 B	12 F	13 E	14 A	15 D	16 G	17 B	18 E	19 F	20 A

4 「コードネーム速読変換ドリル」結果

音楽専門課程の学生と保育者養成課程の学生の「コードネーム速読変換ドリル」の第1番目の課題「major triad」のドリルの計測結果を考察する。

4-1-1 (1) 音楽専門課程の学生の計測結果

2008~2016 年度 音楽大学のポピュラーコース「キーボード演習Ⅰ（ポピュラー）」前期受講生。専門の楽器はピアノ・キーボード、ギター、ベース、サックス、ポピュラーヴォーカル、ポピュラードラム。出席率80%以上の各平均的なタイムの推移の学生を抽出。受講資格は鍵盤楽器経験者。

〔C-M.t.-1〕（図表①）1番～20番までの基本形と第1転回形のポジションで弾いたときのかかった秒数（図表⑤～⑧）。どの年度も初回から1週間に1回、連続4週間の記録である。

（図表⑤）専門楽器がピアノ・キーボードの学生

	基本形				第1転回			
	初回	2週目	3週目	4週目	形 初回	2週目	3週目	4週目
Pf.-A	14	14	13	13	33	33	23	21
Pf.-B	24	22	15	14	37	34	23	24
Pf.-C	20	18	18	16	40	26	32	23
Pf.-D	37	23	18	17	45	34	26	27

鍵盤楽器が主専攻のためピアノ演奏技術が高い。基本形は4週目では10秒台で弾け、第1転回形も20秒台で弾ける学生がほとんどである。

（図表⑥）専門がポピュラーヴォーカルの学生

	基本形				第1転回			
	初回	2週目	3週目	4週目	形 初回	2週目	3週目	4週目
Vo.-A	60	36	33	30	19番	72	54	51
Vo.-B	43	57	34	30	67	63	61	46
Vo.-C	38	43	34	29	66	57	60	45
Vo.-D	67	64	53	42	85	80	74	58

ポピュラーヴォーカルが主専攻の平均的な学生の推移。コードネームは理解していても和音を弾くことに習熟していない学生が多く4週間での成果は上がりにくい。転回形はこの段階では難しい。

(図表⑦) 専門楽器がギターの学生

	基本形 初回	2 週目	3 週目	4 週目	第 1 転回 形 初回	2 週目	3 週目	4 週目
Gu.-A	50	46	39	31	72	90	75	57
Gu.-B	22	27	28	23	58	41	41	31
Gu.-C	65	45	31	29	19 番	59	54	42
Gu.-D	86	77	69	60				

ギターが専門楽器のためコードネーム自体には精通している。鍵盤楽器でのすばやいポジション移動が課題となる。Gu.-B はピアノ演奏技術も高い。Gu.-D は鍵盤楽器経験が少なく開講時には和音を弾くこと自体が難しかった学生。

(図表⑧) 専門楽器がポピュラーヴォーカル (Vo.)、ポピュラードラム (Dr.) の学生

	基本形 初回	2 週目	3 週目	4 週目	第 1 転回 形 初回	2 週目	3 週目	4 週目
Vo.-A	23	25	20	14	40	32	27	28
Vo.-B	13	15	14	12	28	30	25	25
Vo.-C	32	18	17	16	44	31	30	24
Dr.-A	30	30	19	17	36	30	25	25

鍵盤楽器以外が専門で早いタイムで弾けた学生のタイムの推移である。全員ピアノ演奏技術が高い。鍵盤楽器が専門の学生と技能的に差はないという結果であった。

4-1-(2) 音楽専門課程の学生の計測結果からの考察

鍵盤楽器経験の差異によって即応力は違ってくるがどの学生も回を重ねるとかかる時間は短くなる。少しずつでもその成長が自分で確認できるので達成感を感じることができる。ドリルを通じて的確にコードを弾こうというモチベーションが維持できる。ここで基礎を固めることで、どの専攻、どのレベルの学生も各自の演奏の伴奏パートの基礎となりアレンジの手法も広がる。

4-2-(1) 保育者養成課程の学生の計測結果

2017 年度児童教育学科「子ども学ゼミ A」通年受講生の初心者、初級者、中級者、上級者の各平均的な学生のタイムの推移である。

ドリル [C1-1] (図表④) 白鍵がルート音のみの major triad の課題。1 番～20 番までの基本形と第 1 転回形のポジションで弾いたときのかかった秒数 (図表⑨)。実施スケジュール

は初回 6 月 20 日、2 回目 7 月 11 日、3 回目 7 月 18 日、4 回目 7 月 25 日、最終 1 月 23 日。

（図表⑨）

	基本形 初回	2 回目	3 回目	4 回目	最終	第 1 転回 初回	2 回目	3 回目	4 回目	最終
初心者 A	43	41	33	35	26	65	86	73	65	54
初心者 B	33	57	39	39	27	84	76	81	不明	56
初級 A	37	27	27	35	29	74	52	43	43	38
初級 B	36	36	35	38	23	67	55	49	48	39
中級 A	36	31	25	21	14	79	38	33	28	22
中級 B	32	29	24	28	18	78	47	49	42	25
上級 A	23	20	17	17	13	46	32	27	28	21
上級 B	29	22	15	16	13	42	30	25	25	21

4-2-(2) 保育者養成課程の学生の計測結果からの考察

初心者から上級者まで一様に早く弾けるようになっている。最終段階で基本形では初心者と初級者、中級者と上級者は同レベルになっている。また第 1 転回形でも中級者と上級者は同レベルになっている。和音の転回形は、初級、中級、上級者の場合は基本形を弾かずに直接第 1 転回形を弾くことができるようになるが、初心者にはそれは難しいことで基本形を弾いてからポジションをチェンジするので基本形でかかった倍の時間がかかった。しかしこの速さでの正確にポジションをチェンジできるようになったことは大きな成果である。初級、中級、上級者のこの速さでのポジションチェンジは大きな成果といえる。

4-3 比較結果からの考察

音楽専門課程の学生と音楽が専門でない学生の結果を考える。ドリルの難易度や学習期間や回数が異なるので秒数だけの比較はできない。しかし両学生ともピアノ演奏技術の高い学生はコードネームの即応力も高く身に付くのも早い。和音を弾く経験が少ない学生は苦戦し、和音を転回するのがとても難しい作業となる。どのコードにも即応してすぐに弾く時間を短縮していくのはピアノ演奏技術と比例する。しかし、「コードネーム速読変換ドリル」と「両手奏による鍵盤順のコード奏のドリル」を積み重ねることにより経験の有無にかかわらずどの学生も必ず成果が出てコードネームを覚えて弾くことができる。3 種類のコード「major triad」「minor triad」「dominant 7th」を応用しながらの反復練習の積み重ねで確実に定着するので自分の演奏向上につながることを実感できる。また、鍵盤上で 3 種の和音を早く確実に把握できている

ので両学生ともこの他の数々の付加和音の習得が早くなった。

5 まとめ

成人のピアノ演奏技術向上のためにコード付きメロディー譜による演奏法は有効である。そのためにコードネームを効率よく習得する必要がある。それまでの音楽経験や楽典の知識が大きく影響することなく誰でもコードネームを習得することができることがわかり、この指導法の有効性が確信できた。コードの知識を得て理論上表記法として理解してもそれだけでは活用に至らず、指導者はコードネームを使った演奏の活用法の多様性を認識して学習に取り入れることが重要である。活用することを実感しながら学びを深めることで音楽の諸要素を統括的に学び演奏技術向上に繋がる。コードネームを使って自由な演奏ができることを早期に実感するためには3種類（「major triad」、「minor triad」、「dominant 7th.」）のコードに即応できる技能を早く定着させる必要がある。その手法として「コードネーム速読変換ドリル」と「両手奏による鍵盤順のコード奏のドリル」を積み重ねることが有効であることがわかった。

成人の方々のピアノ演奏技術をもっと活用し楽しい表現活動となるために、指導者はピアノ演奏者一人ひとりが積極的に自分の望む音楽を自己表現できるような学び方を研究していく必要があると考える。従来の指導法、いわゆる既成曲からの学び、大譜表に記された楽譜の読譜から始まる学びの重要性を尊重しながらも、新しい演奏法としてクラシック音楽、ポピュラー音楽というジャンルの垣根を越えて、コードネームを学び、コード付きメロディー譜を活用してピアノ演奏技術とアレンジ力を育みながら自由自在なピアノ演奏ができるスキルを身に付けていくことが、これからの成人の方々のピアノ演奏の学び方であると考え。本稿ではコードネームに関して述べたが、練習曲や色々な作品を順序だてて学ぶことが効率的な演奏技術向上に繋がるように、コードネームの学び方やアレンジの学び方を含んだ指導カリキュラムを確立して、広く誰でも学べるメソッドを構築していくことが必要であると考え。成人でピアノを弾く方々が自分の表現したい音楽を聴き奏でながら音楽に必要な諸要素を育みつつ演奏技術を効率的に向上させて生涯にわたって豊かな音楽活動をされる一助となれればと考える。

<引用・参考文献>

- 1 井本英子 (2018) 『活用できるピアノ奏法～コードネームを用いたピアノ演奏法の実践と考察～』 夙川学院短期大学『教育実践研究紀要』第12号 p.12
- 2 L. チョクシー／R. エイブラムソン／A. ガレスピー／D. ウッズ 訳者板野和彦 (1994) 『音楽教育メソッドの比較』 全音楽譜出版社
- 3 4 L. チョクシー／R. エイブラムソン／A. ガレスピー／D. ウッズ 訳者板野和彦 (1994) 『音楽教育メソッドの比較』 p.65 全音楽譜出版社
- 6 井本英子 (2018) 『「草競馬」音楽教材としての活用法～音楽表現力育成と音楽技能向上のための考察～』 夙川学院短期大学『教育実践研究紀要』第11号 pp.24～36
- 7 井本英子 (2018) 『活用できるピアノ奏法～コードネームを用いたピアノ演奏法の実践と考察～』 夙川学院短期大学『教育実践研究紀要』第12号 pp.12～26

<注釈>

- ⁵ 本学では、ピアノ（鍵盤）レッスンの経験がなく本学で初歩から学ぶ学生を初心者、レッスン等での学習経験がありピアノ教材『ブルグミュラー25の練習曲』学習程度を初級者、『ソナチネアルバム』学習程度を中級者、『ソナタアルバム』学習程度を上級者とする。